



ハンス・ロット

ハンス・ロットの時代

ロット再評価の原点、ブルックナー

作曲家ハンス・ロット（1858～84）は、ゲルハルト・ザムエルがシンシナティ・フィルを振ってホ長調の交響曲を世界初録音しリリースした1989年まではほぼ無名に近かった。それまでロットの名を目にするもっとも高い可能性は、マーラー（1860～1911）の妻であったアルマ・マーラーの回想録のなかで、夫グスタフがウィーン音楽院時代の2歳年長の学友について、その才能を惜しむことばを漏らす段にあった（マーラーはロットのホ長調交響曲と、やはりホ長調の〈オーケストラ組曲〉を楽譜でよく知る機会を得ていた）。しかしながら、マーラーが評価したロットの作品をちゃんと聴く機会は長らくなかった。出版された楽譜がなかったことが大きな原因である。

もちろんロットの名はけっして完全に忘れられていたわけではなく、関係者の努力によって細々と記憶に残されていたのであるが、そこようやく陽が当たり始めたのは1975年、ブルックナー（1824～96）の校訂者として有名なレオポルト・ノヴァーク（1904～91）がオーストリア国立図書館に遺されているロットの作品と未完成スケッチの冒頭楽句付きカタログを作成した

ときであった。これはリンツのブルックナー協会の設立者であるフランツ・グラスベルガー（1915～81）の還暦記念論文のなかに収録されているが、ブルックナーのオルガン演奏の弟子であったロット自身から続くブルックナー絡みの「ロット・ルネッサンス」には因縁深いものがある。



ブルックナー

同じくブルックナーの校訂者として知られるローベルト・ハース（1886～1960）の下で学んだ23歳のグラスベルガーが、オーストリア国立図書館の音楽資料の司書になったのが1938年。カタログを作成したノヴァークが師事した音楽学者グィード・アードラー（1855～1941、やはりブルックナーの音楽理論の弟子）がユダヤ人であるがゆえにウィーン大学を追われたのも同じ1938年だ。この年はナチによるオーストリア併合の年でもある。そしてナチ党員であったハースが第三帝国崩壊後の1945年に失脚したあとに、ブルックナーの校訂を任されたのがノヴァークだった。オーストリアというとても狭い社会や人脈のなかで物事が進んでいるのがよく分かる。ロットの教師世代で生前に彼の才能を認めていたのはブルックナーひとりであったが、彼がいなければ、あるいはブルックナー自身の評価の歴史がなければ、ロット再評価の流れはできなかったか、もっと悠長な流れになったはずである。その意味で、ブルックナーは死後もロットの評価に貢献したといえるだろう。

ワグネリアンだったユダヤ人、アードラーとの交流

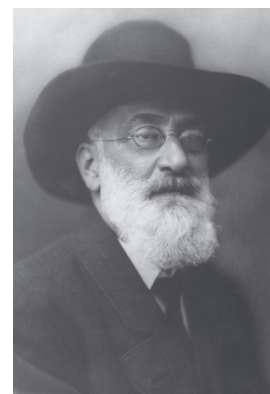
しかしながら、こうした狭い社会が開かれる契機というものもなかったわけではない。その意味では、このなかの最年長者であるアードラーがキーパーソンだろう。このひとは近代的な音楽学の創始者として知られ、「歴史的音楽学」と「体系的音楽学」という歴史と理論の区別を基礎付けながら、西洋音楽研究とともに現在の民族音楽研究の祖に当たる「比較音楽学」という分野の礎を確定したひとでもある。実は、ウィーン音楽院でアードラーはロットやマーラーのほんの少し上の世代として行動を共にしていた。なんの行動かという、ワグナー受容である。19世紀後半のドイツ音楽史上

でいちばんの大家といえばワグナー（1813～83）であろう。もちろんブラームスもブルックナーもいるわけだが、音楽を超えて文学・演劇・美術等々、さまざまな分野に「ワグネリズム」の潮流を用意したワグナー以上に文化に大きな影響力を持った作曲家はいない。

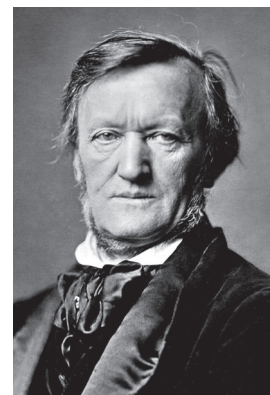
ワグナー作品がブルックナーやアードラー、ロット、マーラーらの住む（ことになる）ウィーンに知られ始めたのは1870年代。それ以前、60年代までのワグナー上演はほんの一握りだが、70年代の上演数は格段に増える。当然それはワグナー人気の高まりを意味している。1873年にはウィーン・アカデミー・ワグナー協会が発足し、ワグナー作品の普及と喧伝に努めるようになったが、その設立の中心にいたのが指揮者のフェリックス・モットルと並んでアードラーであった。ここにブルックナーをはじめロットやマーラーも所属して、パイロイト詣でを行っている。

多元化を許容する道

当時のウィーンの音楽界は、こうしたワグナー熱の高まりとともに、守旧派ともいえるブラームス派と、新しいいわば外様のワグナーを支持するワグナー派に分断されて、それはカフェ文化の普及とともに、新聞の文化欄（フュトン）を巻きこんで大きな対立構造ができあがった。しかし、この両派はブラームス派に属する批評家のエドゥアルト・ハンスリック（〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉のベックメッサーのモデルとしてワグナーに茶化される）がワグナーに辛辣な評を書いていたために、たしかに強く対立はしていたが、実際の音楽の現場はそう単純なものではなかった。ことにアードラーやロット、マーラーの世代、すなわちワグナー受容の第一世代は、ワグナーに熱狂はするものの、だからといってそれが「保



アードラー ©Georg Fayer

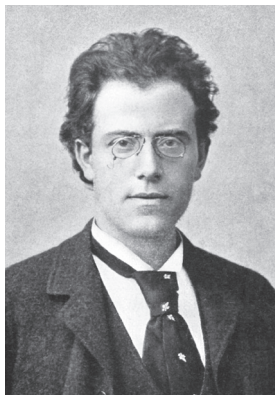


ワグナー

守的」で「アカデミック」なブラームスを拒絶する要因にはならなかったのである。彼らは両方を見つめながら自分たちの音楽のスタイルを決め、また研究対象を広げていった。歴史に対するこうした相対的といえるような視点は、彼らの次の世代にはもっとはっきりとした形をとった。

アードラーの弟子であった作曲家アントン・ウェーベルン（1883～1945）は、師のアーノルト・シェーンベルク（1874～1951）とともにマーラーに力づけられた世代であるが、アードラーのもとでルネッサンス音楽の研究をしながら、もっとも先鋭的な十二音技法で無調の作品を書いた。ウ

ェーベルン自身はこってりした口マン派が好みであったし、ワグネリアンであったシェーンベルクのブラームス好きはつとに有名だ。シェーンベルクに始まる新ウィーン楽派は、同世代の反ユダヤ主義者の作曲家ハンス・プフィツナー（1869～1949）と鋭く対立したが、マーラーはこのプフィツナーに対しても寛容で、ウィーン宮廷オペラでの彼の作品上演を推進している。いずれも、音楽の様式を一元化して捉えない、新たな世界観の下での音楽活動が垣間見られる。



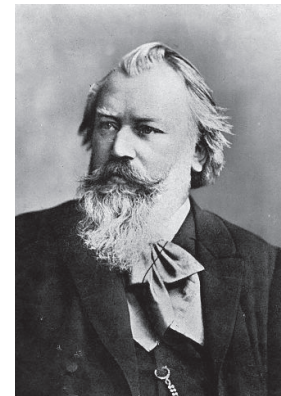
マーラー

ブラームスから否定されたロット

ハンスリックやブラームスの世代は、当時のウィーンのアカデミックな音楽を代表していたが、それは単に創作上でそうだっただけでなく、アカデミックなキャリアを評価する立場にいたということでもある。すなわちロットやマーラーの世代の若書きの作品を評価し、音楽院を卒業させ、場合によっては賞を与え、奨学金の受給者を決め、キャリアへの道筋をつけてやるのも彼らの役割であった。ワーグナーに熱狂するロットやマーラーたちの世代は、ブラームス世代の教師たちから評価されることが、まずキャリアの出発点となる。それゆえ、現実的な意味でもこのブラームスの音楽を無視することなどとうていできなかった。

たしかにロットは「ワーグナーは天才だ、ハンスリックは悪党だ」というこ

とばも残しているが、逆にいえば、それゆえにブラームスやハンスリック世代からの否定的な評価はショックでもあり、同時に独自の創作への意欲をかきたてる刺激にもなった。1870年代、ハンスリックとブラームスはともにウィーン音楽院の卒業試験審査員であり、またブラームスはベートーヴェンの生誕100年を記念して設立された奨学金である「ベートーヴェン賞」（設立は1876年）の選定者でもあった。この賞にマーラーとロットは2回ずつ落ちている。ロットの2回目の対象作品は木長調の交響曲と弦楽四



ブラームス

重奏曲、そして〈田園前奏曲〉が入っていた。ことにブラームスの評価は厳しかった。マーラーと異なり、歌劇場指揮者という職能を持たないロットの生活は音楽院修了後、とたんに窮地に陥った。けっして本意ではない、場末ともいえるミュールハウゼンでの合唱指揮の職にロットが応じたのは、こうした事情からであった。

世紀末の病

マーラーや、彼と同年生まれのフーゴ・ヴォルフを含め、世紀末の作曲家には精神を病んだひとが散見される。ハプスブルク王朝の末期、時代や社会自体が病んでいたといってもよい。1880年10月夕刻にミュールハウゼンに向かう列車のなかで、タバコに火を付けようとした乗客を見た瞬間、ロットの精神は切れた。彼は持っていた回転式拳銃をその乗客に向けて叫んだ。「ブラームスが仕掛けた爆弾でこの列車はいっぱいだ!」。これは正気を失った彼が送りこまれたウィーン精神科病院での担当医の日記によるものだ。

世紀が変わる直前の1897年、ユダヤ人マーラーはウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に就任、翌年にはウィーン・フィルも率いるようになった。98年、ユダヤ人のワグネリアンだったアードラーは、同じユダヤ人のハンスリックのあとを受けてウィーン音楽院の教授職に就いた。

〈ちょうき せいじ・音楽評論家〉

常に真正面から向き合う流儀 歌劇場をまとめるヴァイグレの魅力

森内 剛



ヴァイグレ（左から2番目）と筆者（左）。2018年秋の〈ルサルカ〉公演にて（筆者提供）

当団常任指揮者のヴァイグレは、フランクフルト歌劇場の音楽総監督も務めています。同歌劇場のヘッドコーチとして、日々ヴァイグレとともに音楽作りの現場に携わる森内剛さんに、ヴァイグレの音楽や魅力についてご寄稿いただきました。（編集部）

真摯で純粋な音楽へのアプローチ、絶大な存在感

2008/09シーズンからフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めるヴァイグレの、リハーサルや公演における「存在感」と「説得力」は、やはり絶大かつ絶対的なものです。一方で、オーケストラ、アンサンブル（所属歌手）や音楽スタッフに十分な実力が備わっていないければ、監督の要求がどんなに高くても絵に描いた餅。そういったバランスを考えても、現在のフランクフルト歌劇場とヴァイグレの関係は最良のものであり、円熟期に差し掛かったと言えると思います。また、実は昔気質のお堅い「マエストロ」という表現とは無縁のセバスティアン、我々にとっては素晴らしい監督であると同時に、良き同僚でもあります。

ヴァイグレの音楽作りに関しては、皆様もすでにお感じになったかもしれません。彼の音楽に対するアプローチは、真摯で純粋。ありきたりに聞こえるかもしれませんが、それほど音楽に真正面から向かっていくのがヴァイグレ流です。ホルン奏者としてオーケストラでのキャリアを積んでいたこともあり、ユーモア（最近で

は日本語でも!）をもって楽員の心をつかむ術も心得ています。フランクフルトでは、スケジュールの許す限り自ら稽古に顔を出し、歌手やコレペティートル（ピアノを弾きながら音楽稽古を行うコーチ）、演出家と意見を交わしつつ音楽を練り上げます。今日、オペラ、コンサート両方の分野で世界的に成功している数少ない指揮者の一人となったのは、やはり労を厭わず少しでも多くの時間を共演者と共有する、そして歌の面でも、他人の意見という面でも、人の「声」に耳をよく傾けるというのが、成功の鍵になっているのではないのでしょうか。

高い人間力、そして飽くなき音楽への情熱

2017年夏、東京で私が彼の音楽アシスタントとして参加していた〈ばらの騎士〉（東京二期会、読売日本交響楽団）の稽古中、ボソッと「実は、今ヘッドコーチを探しているんだけど……」と言い始めたヴァイグレ。「そうなんですか」「うん、君、来ない？ フランクフルト」「はい、行きます」といった調子で話が進み、2018/19シーズンからフランクフルト歌劇場のヘッドコーチを務めることになりました。その主な仕事は、監督の求めるものを現有戦力で実現するための現状把握、練習メニューや配分、他のコーチとのコミュニケーションなど、たとえて言うなら、野球における監督とヘッドコーチの関係に近いかもしれません。それだけに、ヴァイグレの「留守中」にも頻りに連絡を取り合いますが、日本滞在中はとにかくご機嫌で、仕事のメールだけでなく、「otsukaresamadeshita!」というメッセージと共に生ビールの写真が送られてくることも。

ヴァイグレの魅力はまずその人間性、人間力、そして飽くなき音楽への情熱という他に言葉が見つかりません。彼がフランクフルトを離れている間に我々が首を長くして帰りを待っているのと同様、読響のメンバー、スタッフ、ファンの皆様もヴァイグレの次の演奏会を心待ちにしていच्छやることでしょう。読響とヴァイグレの関係がより一層の発展を遂げられますように。

Profile 森内 剛（もりうち たけし／指揮・フランクフルト歌劇場ヘッドコーチ）

国立音楽大学（ピアノ専攻）を卒業後、渡欧。ザルツブルク・モーツァルテウム大学指揮科でD.R. デイヴィスらに師事。2009年からリンツ歌劇場コレペティートルとカペルマイスター、オペラスタジオ音楽主任を歴任、9シーズンの間に250に及ぶオペラ公演を指揮。ヴァイグレに招かれ、18/19シーズンよりフランクフルト歌劇場ヘッドコーチに就任。今年5月〈運命の力〉では、公演中に倒れた指揮者に代わり急速第4幕を指揮し、成功を収めた。

10月の公演

世界的巨匠テミルカーノフが指揮する衝撃の〈バビ・ヤール〉



10/9 水 第592回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=ユーリ・テミルカーノフ(名誉指揮者)
バス=ピョートル・ミグノフ
男声合唱=新国立劇場合唱団(合唱指揮=富平恭平)
ハイドン:交響曲 第94番〈驚愕〉
ショスタコーヴィチ:交響曲 第13番〈バビ・ヤール〉

興奮のクライマックス! 巨匠が振るチャイコフスキー第5番



10/14 月・祝 第115回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

10/15 火 第626回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮=ユーリ・テミルカーノフ(名誉指揮者)
ヴァイオリン=エマニュエル・チェクナヴォリアン
シベリウス:ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー:交響曲 第5番

《情熱のブラームス》 豊潤な響き、たつぷりと歌い込むメロディ



10/19 土 第221回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

10/20 日 第221回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=ユーリ・テミルカーノフ(名誉指揮者)
ヴァイオリン=セルゲイ・ハチャトゥリアン
ブラームス:ヴァイオリン協奏曲
ブラームス:交響曲 第2番

10月公演の聴きどころ

10月は、ロシアの世界的巨匠テミルカーノフ(名誉指揮者)が来日し、三つのプログラムを指揮する。

10/9《定期》 ショスタコーヴィチの大作、交響曲第13番〈バビ・ヤール〉を披露する。「バビ・ヤール」はウクライナにある溪谷の地名で、ナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺が行われた場所のこと。バス独唱と男声合唱によって歌われる歌詞は反ユダヤ主義を非難する内容となっており、初演当初から大きな反響を呼んだ。時代背景を熟知しロシアの歴史に真摯^{しんし}に向き合ってきたマエストロの、熱く説得力ある演奏に期待が高まる。バスはテミルカーノフの信頼も厚いミグノフが務める。

10/14《みなとみらい》、10/15《名曲》 チャイコフスキーがメインのプログラム。「苦悩から歓喜へ」の流れが明確な人気の交響曲第5番を壮大なスケールで指揮し、会場を熱狂の渦に巻き込むだろう。前半は、シベリウスのヴァイオリン協奏曲を取り上げ、エマニュエル・チェクナヴォリアンがソロを奏でる。1979年、80年に読響に客演歴があり「爆演」で知られていた名指揮者ロリスを父とし、ウィーン響やベルリン・ドイツ響などに次々とデビューしている若手注目株だ。フィンランドの美しい自然を彷彿させる響きが全編に現れる傑作を、豊かな感性と完璧な技巧で奏でるだろう。

10/19、20《土日マチネー》 ブラームスの傑作2曲をお贈りする。交響曲第2番は、ブラームスが避暑で訪れた風光明媚^{ふうこうめいび}な湖畔で自然を感じながら作曲した、伸びやかで生き生きとした作品。また、ヴァイオリン協奏曲は、ブラームスの作曲活動が最も充実していた時期の作品の一つ。テミルカーノフが叙情味あふれるブラームスのメロディーを温かく響かせ、円熟の極みを見せる。ソロは、アルメニア出身でエリザベート王妃国際コンクールで優勝し、世界で活躍する新鋭・ハチャトゥリアンが登場し、ブラームスの奥深い世界を創り上げる。(文責:事務局)

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時-18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

小林が魂を込める〈新世界〉、新鋭・伊藤が奏でる郷愁の旋律



11/17 日 第116回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮=小林研一郎(特別客演指揮者) チェロ=伊藤悠貴

ドヴォルザーク:チェロ協奏曲

ドヴォルザーク:交響曲 第9番〈新世界から〉

現代音楽に長けた中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン



11/18 月 第23回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (プレ・トークあり)

《中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン》

ピアノ=中川賢一*、小坂圭太 ヴァイオリン=瀧村依里*、對馬哲男 チェロ=遠藤真理*、高木慶太 フルート=倉田優、片爪大輔 クラリネット=金子平*、芳賀史徳 打楽器=西久保友広、野本洋介 音響=有馬純寿

ライヒ:クラッピン・ミュージック

ライヒ:ダブル・セクステット

メシアン:世の終わりのための四重奏曲*

チェコの俊英ネトピルが振る〈ブラハ〉と〈シンフォニエッタ〉



11/23 土・祝 第222回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

11/24 日 第222回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=トマーシュ・ネトピル ピアノ=アレクサンドル・タロー

モーツァルト:歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲

モーツァルト:交響曲 第38番〈ブラハ〉

プーランク:ピアノ協奏曲

ヤナーチェク:シンフォニエッタ

スークの傑作〈アスラエル交響曲〉&リゲティではケラスが共演!



11/29 金 第593回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=トマーシュ・ネトピル チェロ=ジャン・ギアン・ケラス

モーツァルト:歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲

リゲティ:無伴奏チェロ・ソナタ

リゲティ:チェロ協奏曲

スーク:アスラエル交響曲

イギリスの名匠ボルトンが〈第九〉を指揮! 高らかに響く“歓喜の歌”



12/17 火 SHINRYO Presents 〈第九〉 特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール 19:00

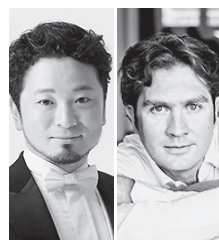
12/18 水 FUJITSU Presents 〈第九〉 特別演奏会
サントリーホール 19:00

12/20 金 第627回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

12/21 土 第223回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/22 日 第223回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/24 火 第24回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪) 19:00



指揮=アイヴァー・ボルトン

ソプラノ=シルヴィア・シュヴァルツ

メゾ・ソプラノ=池田香織

テノール=小堀勇介

バリトン=トーマス・オリーマンス

合唱=新国立劇場合唱団

合唱指揮=三澤洋史

ベートーヴェン:交響曲 第9番〈合唱付き〉

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時-18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

■武蔵野合唱団 第52回定期演奏会

10/3 19:00
木 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=小林研一郎

ソプラノ=澤江衣里

テノール=高橋 淳

バリトン=大沼 徹

合唱=武蔵野合唱団

児童合唱=フレーベル少年合唱団

チャイコフスキー:大序曲〈1812年〉

オルフ:カルミナ・ブラーナ

[料金] S¥6,500 A¥5,500 B¥4,000 ヤングシート ¥1,500

[お問い合わせ] 武蔵野合唱団 080-4811-4866

■読売日本交響楽団 ～珠玉の令和 オーケストラ名曲選～

10/22 13:00
火・祝 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮=松村秀明

チャイコフスキー:戴冠式祝典行進曲、バレエ音楽〈くるみ割り人形〉より

マスカーニ:歌劇〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉間奏曲

スメタナ:交響詩〈モルダウ〉

佐藤直紀:新時代へ(“皇室のお代替わり”楽曲/日本テレビ)

オネゲル:ラグビー

ブッチーニ:歌劇〈マノン・レスコー〉第3幕 間奏曲

ラヴェル:ボレロ

[料金] 全席指定 ¥5,000 (ペア割引あり)

[お問い合わせ] ヨコハマよみうりプレイガイド 045-201-9748 (平日10～18時)

■読売日本交響楽団スペシャルコラボレーション
さだ×よみ音楽会 ～さだまさしを迎えて～

10/28 19:00
月 東京芸術劇場コンサートホール

歌=さだまさし

指揮・編曲・音楽監督=渡辺俊幸

※曲目は調整中です。

[料金] 全席指定 ¥12,000

[お問い合わせ] サンライズプロモーション東京 0570-00-3337